



# Viva Kango

Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing



学校法人 日本赤十字学園  
日本赤十字北海道看護大学  
編集・発行／広報室

〒090-0011 北海道北見市曙町 664 番地 1 TEL 0157(66)3311 FAX : 0157(61)3125  
HP : <https://www.rchokkaido-cn.ac.jp/>



RCH Viva Kango

## 講演会「未来を拓く 赤十字の人道支援」を開催

2025年4月13日から184日間にわたり大阪・関西万博が開催され、赤十字は国際赤十字・赤新月運動館を展開し、31万人を超える方々にお越しいただきました。また、2027年には日本赤十字社が創立150周年を迎えます。本講演会は、これらの節目を見据え、令和7年11月8日(土)に日本赤十字社社長 清家篤氏をお招きし、「未来を拓く赤十字の人道支援」をテーマに開催いたしました。

講演では、「赤十字は、苦しんでいる人を救いたいという思いを結集し、いかなる状況下でも、人間のいのちと健康、尊厳を守る」という、赤十字の基本理念である人道支援の重要性に加え、少子高齢化や労働人口の減少が進む現代社会において赤十字が果たすべき役割や、将来に向けた赤十字運動の展望についてご講演いただきました。これにより、参加した学生、教職員及び一般市民が人道支援への理解を深め、将来の社会貢献への意識を高める機会となりました。特に本学看護学部の子生にとっては、実社会で求められる倫理観や国際的視野を養う貴重な学びの場となりました。また、本講演会は、このほど開学25周年を迎えた本学に対する地域住民の皆様のご理解とご協力への感謝を、改めて共有する機会となりました。



RCH Viva Kango

## 厳冬期災害演習2026が 開催されました

2026年1月17日(土)から18日(日)の2日間にわたり厳冬期避難所展開・宿泊演習2026(以下、厳冬期災害演習2026)が開催されました。全国から124名の防災担当者、災害保健医療福祉従事者が集まり、そのうち107名は外気温がマイナス10℃まで低下する中、本番さながらの体育館にて厳冬期の

宿泊演習を実施いたしました。今年度の演習も継続して「KRAM(トイレ・食事・ベッド・暖房)を網羅しつつ、その内容については大きな改正を行いました。

トイレ(T)のパートでは誰でも行けるトイレをコンセプトに、室内の携帯トイレ、屋外の仮設トイレとコンテナトイレの3種を男性は男性用トイレ、女性は女性用トイレに特化して整備しました。今年度はコンテナトイレを避難所入口近傍に直置きし、スロープの設置を試みることで、

質の高いトイレのバリアの抑制を検証しました。

食事(K)のパートでは蓄電池で駆動させる電子レンジ(蓄電池駆動レンジ)により、多様な種類の冷凍食品を災害時にも使用可能とする取り組みを検証し、災害時の食の重要性を体感しました。災害食は衛生が保たれることを前提に、大量調理が不可欠となります。しかし冬期に寒冷環境の状況では炊き出しをする支援者側に大きな負担がかかることにも、出来上がった食べ物を受け取るために屋外に並ぶことは現実的ではありません。普段食べられている冷凍食品を自らでレンジアップすることは、その時に食べたいもの、温かいものを食べられることにつながります。同時に咀嚼機能に配慮した嚙下食やアレルギーにも個別に対応することが可能となります。今回の演習では6種類の中から選ぶことで、グループ内での団らんにもつなげることができました。

就寝生活環境(B)のパートでは、国が示した指針に基づき避難所開設時にベッド化・パーティション化にチャレンジしました。本学は400台の段ボールベッドを備蓄しています。しかしながら段ボールベッドは重量があり容積が大きく搬送には多大な労力を必要とします。今年度は40台を段ボールベッド、70台はスチールベッドとして、搬送を含め、設営にかかる時間と労力を検証しました。展開に約8分かかる段ボールベッドと比べ、スチールベッドは30



秒で完成するため、全体の設営時間は約3分に短縮され、国の目指す避難所開設時のベッド化に近づくことができました。さらに、一人用ワンタッチテントをベッド上部に設置することでプライバシーを保ち、保温による暖房にも効果的であることを見出しました。

暖房(W)のパートでは熱交換式ダクトヒーター2基を屋外ならびに屋内に設置し、駆動用の電源はプラグインハイブリッド自動車から供給して一晩持続運転させました。ダクトヒーターを稼働させることで屋外から温められた新鮮な空気が流入し、二酸化炭素が減少することを確認し、冬の暖房設備としての有用性が確認できました。

厳冬期災害演習2026においては本学学生も災害専門職能の皆さまとともにグループの中に参画し、滞れない足湯の提供をはじめ数多くの演習項目の運営に従事しました。他の看護系大学では得られない赤十字の本学だからこそその取り組みの中で活躍でき、自身のスキルアップにも貢献したかと思えます。

今回の検証の様子は、左記のサイトから閲覧可能ですのでぜひご覧ください。

### 記事をもっと+

NHKONE web 記事



HBC「もうひとホリ」



## ソフトバンク株式会社との 産学連携プロジェクト

### 令

和7年9月30日、本学とソフトバンク株式会社(東京)は、看護教育におけるICT活用を推進するため、産学連携協定を締結しました。本協定は、看護師育成の質的向上、地域医療支援の強化、そして医療現場における最新テクノロジーの活用促進を目的としています。今後、両者は教育プログラムの共同開発、ビッグデータや生成AIを活用した研究支援、学習支援ツールの導入など、多角的な取り組みを展開する予定です。特に注目されるのが、ソフトバンクが開発した人型ロボット「Pepper(ペッパー)」の導入です。ペッパーは、学生のコミュニケーション



ン力を高める対話型訓練や模擬患者としての実践的な看護演習に活用されます。また、高齢者施設などとの連携を通じて、地域福祉とのつながりを強化する役割も担います。加えて、遠隔地の教育現場においてもペッパーを活用したりリモート指導が可能となり、地域間の教育格差是正にも貢献します。さらに、ソフトバンクの生成AI技術を活用したシミュレーション教育の導入は、医療資源が限られる地域でも質の高い看護教育を可能にします。本学は、現場ニーズに基づいた実践的な教育コンテンツを提供し、ICT技術との融合による次世代教育モデルの構築を目指します。このような先進的な取り組みにより、学生は将来の医療課題に柔軟に対応できるスキルを身につけ、社会に貢献できる人材として成長することが期待されています。本協定は、教育とテクノロジーの融合による新たな価値創出の好例として、今後ますます注目されることでしょう。

## 高大連携協定締結 北見緑陵高校・北見藤高校

### 令

和7年7月24日に北海道北見緑陵高等学校、続いて同年9月9日には北見藤高等学校と本学は高大連携に関する協定調印式を執り行い、新たに高大連携協定を締結しました。これにより、本学は令和5年に締結した北海道北見柏陽高等学校との協定を含め、計3校との高大連携体制を構築したことになります。



本協定は、大学と高校が相互の信頼関係に基づき包括的に連携し、教育・研究面での交流を進めることで、高校生の視野を広げ、進路への意識



や学習意欲を高めるとともに、大学が求める学生像や教育内容への理解を深めることを目的としています。これらの取り組みを通じて双方の教育を活性化させ、地域社会の発展と人材育成に寄与することを目指しています。

調印式後には高大連携推進会議を開催し、協定に基づく取り組みについて協議しました。後期には北見緑陵高等学校の生徒が本学の授業を聴講し、「高校と大学の違いを知り将来をイメージできた」「実技を経験し看護師の仕事への興味が深まった」といった感想が寄せられています。

今後出張講義や合同研修、教育及び研究に関する情報交換を通じて連携をさらに深め、地域の人材育成に一層貢献してまいります。



## 日本看護学教育学会 第35回 学術集会

2 025年8月29日・30日の2日間、一般社団法人日本看護学教育学会第35回学術集会が本学と北見工業大学で開催されました。歴史ある日本看護学教育学会学術集会の本学での開催は、2009年の第19回学術集会以来2回目となります。今回の学術集会では、安酸史子学長が大会長を務め、地域に根ざした学術交流を推進するため、対面・オンラインに加えてオンデマンド配信を組み合わせたハイブリッド形式が採用されました。全国から多くの研究者・教育者が参加し、看護学教育の課題や展望について活発な議論が交わされるなど、実りある学術集



会となりました。また、北見市および北見市観光協会の協力により、会場内では北見市の特産品紹介も実施され、来場者がこの地域の文化や魅力に触れられる機会となりました。



2日目には、「ナーシング・サイエンス・カフェ2025」が開催されました。ナーシング・サイエンス・カフェは、高校生と看護専門職者が「看護」について語り合う人気企画で、将来、看護職を目指す若い世代に看護の魅力を伝える貴重な機会となっています。今回は「看護を学ぶ体験を経て進学するー日本赤十字北海道看護大学における高大連携プロジェクト」と題し、山本美紀学部長から本学が取り組む高大連携の概要が紹介されました。さらに、高校時代に大学講義の聴講や入学前教育を体験し本学に進学した2年生3名（長野美季さん、松井のえるさん、

米澤美怜さん）が、体験を通じて学習意欲や進学への確信が高まったことを語りました。協定校である北海道北見柏陽高等学校の後藤禎和校長と高校生2名からも、高大連携がもたらす成果や今後への期待が述べられ、参加者からは「高大連携プロジェクト」について多くの肯定的な声が寄せられました。

本学術集会の運営には、学部生・大学院生・教職員が一丸となって取り組み、受付対応や会場誘導、配信サポートなどを通して円滑な進行を支えました。参加者からは、丁寧で温かみのある対応に高い評価をいただき、学内の協働体制の強さを示す場ともなりました。今回の学術集会は、学びと地域、そして未来をつなぐ本学の姿勢を象徴する2日間となりました。



## 北見青年会議所との パートナーシップ協定

令和7年7月25日、本学は北見青年会議所とのパートナーシップ宣言書調印式を執り行い、協力を締結しました。本協定は、今後とも友好的な関係を構築し、災害時の連携や地域事業構築の協力関係をより強固なものにすることを目的としております。

協定締結までは、平成30年に発生した北海道胆振東部地震にて本学の支援活動に協力をしていただいたことや、今年4月に北見青年会議所が開催した定例会に本学が携わったことがきっかけとなりました。パートナーシップ宣言書では、平時における協力と災害時における協力の2つの協定が締結されました。平時時においては互いに行う地域



協定締結までは、平成30年に発生した北海道胆振東部地震にて本学の支援活動に協力をしていただいたことや、今年4月に北見青年会議所が開催した定例会に本学が携わったことがきっかけとなりました。パートナーシップ宣言書では、平時における協力と災害時における協力の2つの協定が締結されました。平時時においては互いに行う地域

事業について応援し、事業の際には協力をを行います。また、地域事業を円滑に行うために事務局にて情報交換を行います。災害時においては互いに連携を行い、協力をして速やかな災害対応に勤めます。

本協定の締結や今後の取り組みが、北見市により一層貢献できることを期待しています。

## 納税制度を活用した ふるさと北見応援寄附金

本学では、令和6年1月1日に「ふるさと北見応援寄附金（北見ふるさと納税）」として北見市との間における納税制度を活用した相互協力を締結し、今年の1月で2年目となりました。

これまで、本学のホームページや本学同窓会の公式Instagramなどで周知をおこなって参りましたが、令和7年は2185人の方から計3682万8千円の寄附金が集まりました。この寄附金のうち25パーセントが北見市から補助金として本学に支払われる予定です。

皆さまより頂いた寄附金は、本学の教育環境の充実化や設備等に有効に使用させていただきます。

これからも、地域住民の方を始めとして、皆さまに愛される大学、皆さまに貢献できる大学を目指し、更なる向上を図って参ります。

最後にたくさんのご支援に厚くお礼申し上げます。